

看護ってどんな仕事？—高校生による看護研究発表—

看護とは何かについて、とことん考えよう！！

収録日：2021年8月6日（金）10：00 - 12：00

オンデマンド配信期間：2021年8月19日（木） - 9月17日（金）

オンデマンド配信：高校生参加者数：88名，学会視聴者数：100名

未来の看護を担う高校生が発信者となり、臨地実習を通して考える看護について発表して頂き、コメンテーターの先生方と討論しました。

高校生のプレゼンテーションとその後の討論の様子を今年度は録画をし、オンデマンド配信を致しました。高校生の発表は2校とも受け持った患者さんの背景や生活に関心を向け、患者さんの人生や生活が豊かになるために一生懸命に取り組んだ成果で、コメンテーターの先生方の心を揺さぶるものでした。



1. 高校生の研究発表内容の紹介

1)「看護の力」 発表者：愛知県立桃陵高等学校専攻科衛生看護科の皆様

高等学校3年次に受け持った患者さまへの看護を通して、「看護とは何か」、「看護の魅力はどこにあるのか」について、クラスメートと共に実践した看護場面のロールプレイをしながらわかりやすく発信してくれました。発表の内容は以下の通りです。



臨地実習で「痛い・辛い・疲れた」が口癖の患者さま。決まってリハビリテーションになると、顔をしかめ、少し歩いては「もうやめよう、疲れた」と繰り返す患者さまに、励ましながら促しても効果なく、やる気が出ない様子であった。その患者さまのリハビリ意欲を引き出す看護の力が私にあるのかと疑問をもった。その頃、毎日患者さまと関わる中で気づいたことがあった。それは私との会話ではいつも笑顔だったが、その笑顔がどこか寂しそうで心から笑っていないということであった。自分の話の聞き方に問題があるのか、自分の話がつまらな

いのか、話するのが疲れるから話しかけて欲しくないのか等、患者さまの笑顔に隠れたその意味を考えていた。そんな時、指導者より患者さまには右耳の難聴と構音障害があり、もどかしさを感じていることを教えて頂いた。私は援助中に患者さまに話しかけられても援助に夢中になっていたこと、右耳の難聴に留意することなく話をしていたにもかかわらず、患者さまが笑顔だと人間関係の距離が縮まっていると勘違いをしていた。時々患者さまの返事が私の求めている返事と違うことがあり、私の話が伝わっているのか心配になったがそのまま流していた。そのため患者さまは心から笑うことができなかった。

そこで構音障害を深く勉強して患者さまとのコミュニケーションにおいて、①患者さまが発した言葉を一言一句聞き逃さないよう関心をもって聴く、②わからなければそのまま流すのではなくちゃんと聞き返す、③患



者さまが聞き取ることの出来る声のトーンと大きさ、距離で話す、という3つの目標を立てた。そして患者さまが発した言葉や表情からその意味を考えて、私の看護の力で今ある苦痛を少しでも和らげたいという大きな実習目標を描いた。すると高校時代に野球をやっていた時の話、ご家族のことや小さな会社の社長であったことなどこれまでの人生について嬉しそうに語ってくれた。何か特別に援助をしたわけでもないのに、患者さまの話をお聴くという看護を通して得られる心地よい充実感があった。そこからリハビリにも「疲れたけど、もう少しだけ

頑張ってみようか」と意欲的な変化が見られた。

実習最終日、患者さまに出会えたことで看護の楽しさや達成感が持てたことに感謝し、患者さまに最後の挨拶をした。すると患者さまは涙を流しながら何度も「ありがとう」言い、私もあふれてきた涙をこらえることができなかった。そして「人生には辛いことも悲しいことも沢山ある。でもそれを乗り越えることができれば、必ず自分の力になるんだ。」と構音障害で話しにくさを感じていた患者さまが私のために重みのある言葉をプレゼントしてくれた。長年の経験を積み人生を生き抜いてきたからこそ教えてくださった心に響く言葉だった。私は患者さまと出会い、高齢者は精神性の高い最も自立した敬うべき存在であると理解したと同時に、看護という仕事は、患者さんと出会い、お互いに支え合い、学び合う中で、患者さまから看護の力を頂いているのだと思うことが出来た。

2)「看護アイデア作品 総集編」愛知県立宝陵高等学校衛生看護科の皆様



高校生技術アイデア賞は、将来を担う高校生の皆さんが、ものづくりへの関心を持つと共に、探究心や創造性に富んだ人材を育成することを目的に、愛知県豊橋市主催で、平成16年から開催されている。本学の3年生は、福祉医療用品のテーマで毎年応募している。

本学高校3年生は、27日間の看護臨地実習終了後の

7月から高校生技術アイデア賞に応募する作品の制

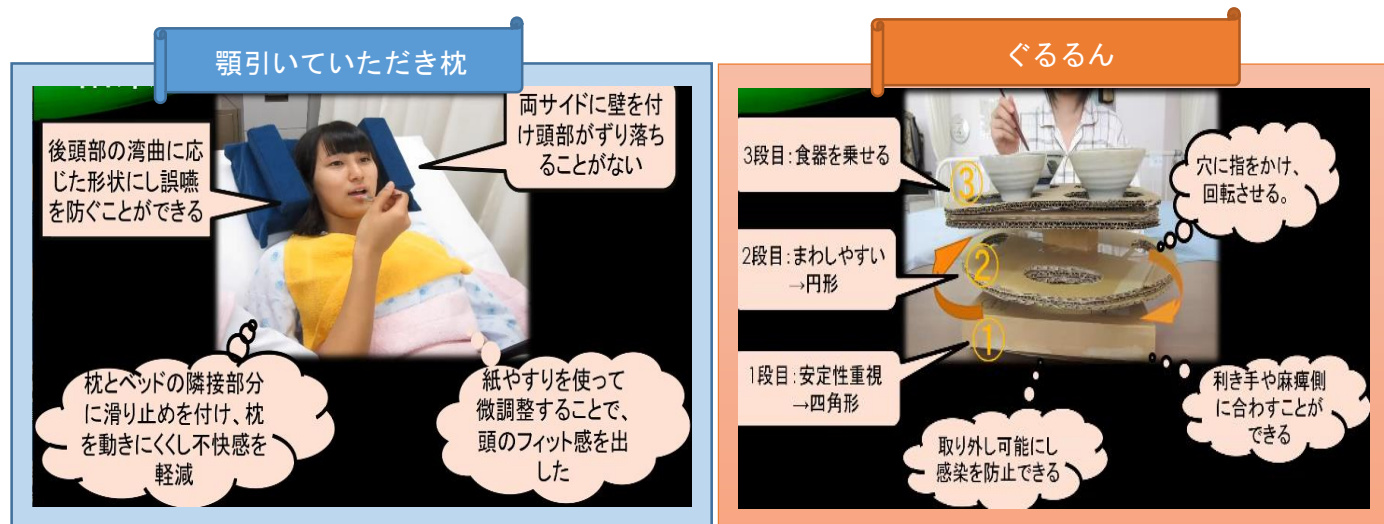
作に取り組む。グループで安全性・快適性・実現性など意見を交わし、100円ショップで必要なものを調達して試作品を作成する。試作品の完成へこぎつけたら、一度使用してみる。またグループで意見を交わし改良を重ね、試作品を完成させる。そして完成作品を応募し書類審査後、上位5作品がプレゼン審査となる。

本学では平成17年から数多くの優秀賞を頂いている。今回は平成27年優秀賞「顎ひいていただき枕」と平成28年入選「ぐるるん」を紹介する。

(1) 顎引いていただき枕

作成した背景は、受け持った患者さまが頸部の筋力的かにより頸部が後屈してしまい、うまく嚥下できない状態にあり、食事に時間がかかっていた。そこでバスタオルを何枚も重ね、頸部前屈位をとるようにした。しかしバスタオルでは体位が安定せず、入院により自由が制限されたとしても、頸部前屈位がとれ、快適な環境で食事ができる物はないかという思いからこの作品が生まれた。工夫点は以下の4点である。①軽量で変形しにくい発泡スチロールを使い、後頭部の湾曲に応じた形状にすることで誤嚥を防ぐことができる。②顔の両サイドに取り外し可能な壁をつくることで枕から頭部がズレ落ちることなく食事ができる。③紙やすりを使って微調整することで頭のフィット感を出した。④枕とベットの隣接部分に滑り止めを付け、枕を動きに

くくし不快感を軽減した。この作品はプレゼン調査で高く評価され、商品化された。



(2) ぐるるん

体格の小さな患者さまや麻痺のある患者さまの食事援助時、腕が食器に当たりこぼれそうになったり、トレイの奥の小鉢がとれなかったりし、悲しそうな表情があった。食事のしにくい患者さまがバランス良く安全にそして苦勞することなく楽しんで食べることができるようにするために何かできることはないか、という思いから生まれた。患者さまが生涯を通して食べることが継続できるように、残された可能性をつなぐ一助になればとの思いが込められている。

工夫点は以下の3点である。①穴に指をかけ少しの力で回転できる。②下の回転盤を変えることで利き手や麻痺側に合わせて左右どちらにも回転できる。③取り外しを可能にし、感染を防止できる。「ぐるるん」も高く評価され商品化に向けてモニターアンケートを4回実施した。

歴代のアイディア作品を振り返り、先輩たちの患者さまに対する思いの強さを感じることができた。患者さまの少しのしぐさや反応を見逃さず、困っていることに気づき、想いを読み取る。どうすれば患者さまの生活が豊かになるのかを、幾度となく意見を交わし形にしていく過程は看護を学ぶ楽しさを教えてくれた。現3年生の自分たちは今、この伝統を受け継ぎ、「ふっシューズ」を作成中である。

2. 看護とは何かについて、とことん考える

2校の研究発表をもとに、2校でお互いに臨地実習の経験から質疑応答をし、高校生と教員で看護とは何かを討論した。看護は患者さまと看護師で創るもので、お互いがより豊かになるように助け合うことである、患者さまは一人ひとり違うため、寄り添い、感じ取り、その人に必要なことを援助すること、目標が同じでも一人ひとり考えていることが違っているので、チームで話し合うことも必要などの意見が出ました。



楽しく討論しました

3. コメンテーターの先生方の紹介とコメント

左) 真野恵子先生

(藤田医科大学 副院長・看護部長)

右) 多喜田恵子先生

(岐阜保健大学 教授)



コメンテーターの2名の先生方から、2校の研究発表をもとに“看護とは”についてコメントを頂きました。

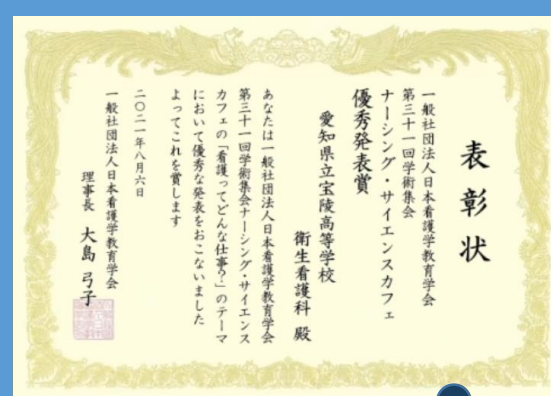
2校の生徒の皆さんの豊かな感性、探究心、創造力に感服した。同時に臨地実習で学生の学びを引き出した高校の先生方の指導力に感銘を受けた。

患者さんの一人ひとりの個別性に関心を持って、より豊かな生活を送るために、感じたり、考えたりすることは、患者さんとの関係性づくりにつながる。患者さんとの関係性ができるだけで看護となる。そして看護は芸術である。芸術とは、1つしかないものであるから今回皆さんが患者さんと共に創りあげた、考え抜いたその人に合った関わりや商品はまさに芸術である。

臨地実習で様々なギャップに戸惑った時に自分の関わりが悪いのではないかと自分に関心を向けてしまうが、今回は患者さんの反応の意味を考えようと、患者さんに感心を向けられたことは、患者さんの今の状況や気持ちをじっくりとゆっくりと把握することにつながった。また食べづらさという患者さんの生活上の困り事を何とかしたいと試行錯誤すること、そのことが患者さんに伝わり、安心感や信頼感となる。さらに看護学生のために頑張るという患者さんの中に力が湧いてくると、看護する側も力が湧いてくる。まさに看護は相互作用である。

4. 理事長からの表彰状授与

2校にオンライン上で、大島弓子理事長より、「優秀発表賞」として、表彰状が授与されました。



5. アンケート結果

オンデマンド配信参加者からのアンケートの結果は以下の通りです。28 名の方から回答がありました。

1) 所属			2) 性別			3) 企画内容の満足感		
所属	人数	%	性別	人数	%	満足感	人数	%
高校生	22	78.6	男性	2	7.1	満足	25	89.3
高校教員	4	14.3	女性	26	92.9	まあまあ満足	3	10.7
専攻科	2+	7.1				あまり満足しなかった	0	0.0
その他	0	0.0				満足しなかった	0	0.0

4) 「ナーシング・サイエンスカフェ」を知ったきっかけ			5) お住まい		
きっかけ	人数	%	都道府県	人数	%
学校の教員から	24	85.7	東京都	3	12.0
チラシ・ポスター	5	17.9	愛媛県	3	12.0
ホームページ	1	3.6	沖縄県	3	12.0
Web 広告	0	0.0	愛知県	2	8.0
学会プログラム	0	0.0	高知県	2	8.0
学会誌	0	0.0	その他 12 県で 1 名ずつ参加した。		

6. 「ナーシング・サイエンスカフェ」に参加されての意見や感想（自由記載）

- ・患者さんが生活しやすい道具を発案し商品化することが看護師になって患者さんと接する中で気づきたいと思いました。
- ・私は、将来助産師になりたいと考えています。そのため、看護についてより深く学ぶことができればと思い、今回「ナーシング・サイエンスカフェ」に参加させて頂きました。実際に、患者さんに寄り添ってきた方々の話を聞かせて頂き、患者さんに寄り添う上で大切なことなど、いろいろな事について学ぶことができて本当に感謝しています。私は、普通科高校に通っているのですが、まだ先の話になりますが、これから今回の「ナース・サイエンスカフェ」で学んだことを活かしていきながら、夢への実現に向けて頑張っていきたいなと思いました。
- ・貴重なお話をたくさん聞かせていただき、本当にありがとうございました。私が通っている高校は看護学校ではないため、そういった経験は大学に入ってからでないとできないが、この発表をされていた二つの高校の発表を聞いて、考えが深かったりして、とても自分の将来に役立つ内容でした。
- ・普通高校に通っており、看護実習の経験はありませんでしたし、実習のお話を聴く機会も初めてでした。今回の 2 校の学生さんの発表をきいてやはり看護は治療することを超えて、心を通わせ、寄り添い、1 人 1 人の患者さんに合わせたケアが必要だと感じました。私は大学で看護を学びたいと考えていますが、実習を経験する際には常に問題解決の意識を大切にしたいと思いました。
- ・看護体験など全てが中止になって体験できなかったのが、実際に体験した人の話が聞けたことはありがたかった。
- ・看護とは何かを明確に考えるのは難しかったですが、自分の中でこんな看護師になりたいって言う思いが定まってきました。

・高校の看護科教員ですが、看護学生全体はもちろんですが、高校で看護を学ぶ生徒によい刺激になる企画だったと思います。今回の発表を聞いて、看護を学ぶことにさらに前向きになった生徒が多くいたと思います。また、私たち教員も先生方の指導力の高さに見習うところが多かったです。ありがとうございました。

・看護師を目指している中で、病院実習に不安を持っていましたが、二つの高校のお話を聞けて、患者さんとのコミュニケーションの大切さ、看護職のやりがいなどを知ることができ、看護専門学校への進学がさらに楽しみになりました。私も、患者さん1人1人に向き合い、患者の話に耳を傾け関心を持ち看護師にしかできないことを意識しながら看護の勉強を続けたいです。とても良い経験ができました！ありがとうございました。

・医療現場に実際に関わっている方々のご意見や、同世代の方々が実践されていることなどをお話の中で学び、医療現場に携わることは大変でもあるが、やりがいのあることなのだと改めて感じました。将来、医療従事者を目指している身として、大変勉強になりました。有難う御座いました。

・同じ高校生でも看護について考えており、実習を通して患者さんの不快と思ってる部分を変えようとしている姿に驚きました。

・桃陵高校と宝陵高校の方の発表を聞いて、患者さんに寄り添った上で、患者さんに対してこうしたら良いのではと、深い考えをされていてすごいと思いました。実習を通しての気づきから、課題発見、解決の策を考え、実践していてすごいと思いました。私は寄り添える看護がしたいと思っていて、その中で寄り添える看護は必要というお話が出て、私自身寄り添える看護について深く考える良い機会になりました。

・看護は寄り添うこと。看護は芸術。そのような言葉に感動しました。看護とは何かを考えるきっかけとなりました。ありがとうございました！

・高校生のうちから実習を通して患者さんにどのようにサポートをすればよいのかについて自らが課題発見をして実行していくことは同じ高校生である私にとっては想像できないことなのでとてもすごいと思いました。私も、看護師になるために、実習を通して、自らが積極的傾聴をもち、患者さんの些細なことでも気づき、改善できる看護師になりたいと改めて実感することができました。

・高校生が実際に患者の視点に立って具体的に考え、行動していることが素晴らしいと感じた。

6. 記念撮影



以上